特活研究

No.91 －今こそ特別活動！－

2019. 12　愛媛県教育研究協議会　特別活動委員会

第51回 愛媛県特別活動夏季研究会

日時：令和元年８月２日(金)

会場：西条市総合文化会館

絆を深め、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の創造

第51回 愛媛県特別活動夏季研究会に寄せて

愛媛県教育研究協議会特別活動委員会

委員長　**妻　鳥　昇　司**

本日、「LOVE　SAIJO　まちへの愛が未来をつくる」・・・そのようなすてきなキャッチフレーズを持つ西条市において、特別活動に熱い「愛」をもって未来を創ろうと日々努力されております多くの先生方とともに、第51回愛媛県特別活動夏季研究会が開催できましたことに、心より感謝申し上げます。また、昨年度は、第50回記念大会が松前町において盛大に開催されましたこと、この場をお借りしてお礼申し上げます。

さて、特活を愛する皆さん、教職に就いてから、特別活動とのすてきな出会いは、いつ、どのようなものだったでしょうか。私事で恐縮ですが、私が本格的に特別活動に出会ったのは、今は廃校になっているへき地５級の学校から異動した先の中学校です。パワーあふれる生徒達。生徒指導上の課題が山積みでした。そこで、特別活動で子どもたちが本来持っている力を引き出し、学校を改革しようと全職員が立ち上がりました。私は、生徒会担当。学級活動を生徒が運営、委員会活動を再編、リーダー研修会の実施、委員会や学級活動と連携した集会活動を月１回以上開催・・・。とても大変でしたが、どんどん変容していく生徒達と同志である教職員との実に輝いた日々。特別活動によって生徒達に笑顔と活力が蘇りました。そして大人になった子どもたち。同級会で盛り上がる話は、やはり、学級活動、学校行事、生徒会活動・・・全て特別活動に関わる思い出。特別活動は、彼ら彼女らの生き方に深く関わることができたのではないでしょうか。教員生活も総括を迎える昨今、今更ながらに特別活動を通して子どもたちと共に育つことができたことに感謝しています。皆様も、特別活動で、数々の感動のドラマを築かれてきたことでしょう。これからもその「物語づくり」を発展させ続けてください。

11月15日(金)、第14回四国地区特別活動研究大会徳島大会が海陽町立宍喰小学校で開催されました。愛媛は「学級活動（低学年）」分科会と「学校行事」分科会で提案。四国四県の熱い特活ラバーズと交流の中、愛媛特活のラブパワーに拍手が贈られました。次回大会は、令和４年度、愛媛開催です。会場は今治市立常盤小学校です。愛媛大会に向けてという視点からも、子どもたちの輝く愛顔のために、特別活動のさらなる発展に努めようではありませんか。

特別活動への熱い「愛」と意義を再確認する本大会ですが、今回も、文部科学省の安部恭子先生にご指導いただけましたこと、心より感謝申し上げます。また、各分科会では、アドバイザーとして愛媛大学から、尾川先生、藤原先生のご助言をいただく機会に恵まれたこと、ありがたく存じます。

最後になりますが、各分科会での発表・司会・記録の先生方、志の高い西条市特別活動主任会の皆様、研究会の準備・運営に携わっていただいたすべての先生方に深く感謝申し上げまして、挨拶といたします。

LOVE特活　特活への愛が未来をつくる

（小・中学校共通）特　別　活　動

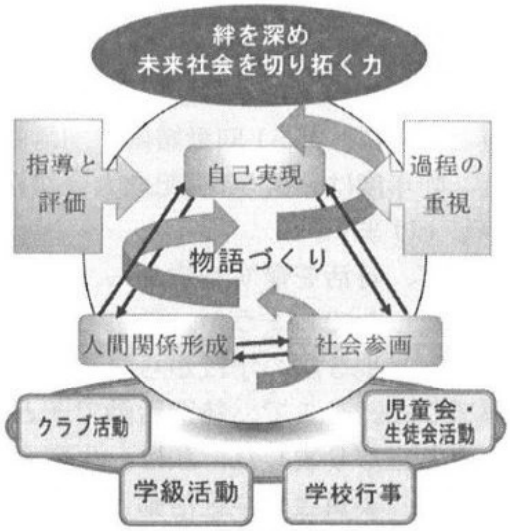
Ⅰ　研究主題

絆を深め、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の創造

―「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の視点を踏まえた『物語づくり』の実践を通して―

Ⅱ　研究主題のとらえ方

現在、社会の急激な変化により、予測が困難な時代となっている。子どもたちを取り巻く現状も、「豊か」と言われる社会の中で、貧困問題を抱える子どもたちの存在や、通信機器の発達により、ネット依存症やコミュニケーション能力の低下など様々な問題を抱えている。特別活動は、学級活動、児童会・生徒会活動、クラブ活動、学校行事から構成され、様々な集団活動を通して、児童生徒が、社会で生きる基盤となる力を育む活動として機能してきた。また、協働性や互いを認め合う土壌をつくり、生活集団、学習集団として機能するための基盤となってきた。「なすことによって学ぶ」という実践的な活動は、集団への所属感、連帯感を育み、それが学級文化、学校文化への醸造へとつながり、学校の特色ある教育活動の展開を可能としている。そこで、今後も「絆を深める」というテーマで、人との関わりをより重視し、心の育ちに着目した内面的な結びつきを大切にしながら、よりよい人間関係を築くための研究を進める。「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を踏まえて、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組む中で、集団の中で個が成長し、その成長が結びつきながら集団の成長へとつながる。この成長過程の足跡こそが自分たちの物語である。特別活動における、この『物語づくり』の中で培う「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせることが、未来社会を切り拓く力を育み、自分らしい生き方へとつながっていく。



Ⅲ　研究のねらい

1　「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の視点を踏まえて、児童生徒の絆が深まるような授業実践やその振り返り方法について実践的に研究する。

2　「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の在り方を、各教科や道徳科、総合的な学習の時間等との関連を図りながら研究し特色ある活動の創造に努める。

Ⅳ　研究の視点

1　よりよい人間関係を築く資質・能力の育成
～魅力ある学級の物語づくり～

一人一人が生かされる学級活動を展開し、それに伴い集団も成長する学級文化を育む。

○　温かい学級集団の中で、よりよい生活を築く実践のための話合い活動の充実

○　よりよい人間関係を形成し、自己の成長を目指す意思決定の在り方

○　キャリア教育と自己実現を図る一人一人の意思決定の在り方

2　よりよい学校生活・ボランティア活動などの社会参画する資質・能力の育成
～自発的・自治的な児童会・生徒会活動の物語づくり～

学級や学年を超えた児童生徒相互の連帯感を深める自発的、自治的な活動を効果的に展開する。

○　児童生徒が主体的に創りあげ、よさを認め合える異年齢集団活動の充実

○　児童生徒が主体的に組織づくりを行い、課題解決のために合意形成を目指す実践の在り方

3　よりよいつながりを楽しむ資質・能力の育成
～協働し、認め合うクラブ活動の物語づくり(小学校)～

異年齢集団での活動を通して個性の伸長を図り文化を実体験できる活動を工夫する。

○　地域の特色を生かし、地域の人や文化とつながるクラブ活動の設定

○　異年齢集団で共通の興味・関心をより深く追求するクラブ活動の指導と評価の工夫

4　よりよい校風を確立しようとする資質・能力の育成
～集団への所属感、連帯感を深める学校行事の物語づくり～

創造的でダイナミックな体験ができる場や時間を保障し、所属感や連帯感を培う。

○　児童生徒が積極的に参加し、特色ある学校づくりやよりよい校風づくりにつながる学校行事の工夫

○　多様な他者との交流や豊かな体験活動を通して感動を生み出す行事の工夫

Ⅴ　評　価

1　特別活動の目標を分析し、育成しようとする資質や能力と評価の関係を明確にし、評価の観点を各学校において独自に設定し、指導と評価に生かす。　【評価の観点】

2　各内容の目標を踏まえ、学校の実態や発達の段階等に即して、評価規準を明確にし、児童生徒一人一人のよさや成長を加点評価する。その際、集団の質の高まりについても評価し、その後の活動に生かす。　【個と集団の評価】

3　活動の過程を重視し、自己評価、相互評価、教師の観察、児童生徒の記録等を活用し、継続的、多面的、総合的に児童・生徒の変容を評価することで、活動意欲につなげる。　【評価の方法】

Ⅵ　留意事項

○　全体計画と各活動・学校行事の年間指導計画の作成に当たっては、学校の創意工夫を生かし、学級、学校づくりを念頭に置きながら、学校の実態や児童生徒の発達の段階等を考慮して自発的、自治的な活動が助長されるようにする。また、各教科等の特性を踏まえ、適切な関連を図るとともに家庭や地域の人々との連携を工夫する。また、それらの計画は、必ず評価を伴うものとする。

○　特別活動と道徳教育は、子どもの心を育てる二つの大きな原動力であり、両者の関連付けを研究しながら、子どもの変容を評価につなげる。特別活動での学級や学校生活における集団活動や体験活動は、日常生活においての道徳的実践の場となる。特に、自己の生き方について考えを深め、集団のために働き、その一員としての責任や役割を担うなどの社会参画の力を育てるためには、道徳科の授業との関連が重要となり、両者の特質を十分理解し、道徳性の育成へとつなげる。

○　児童生徒一人一人が社会的・職業的自立のために必要な能力を育成するため、自らの生き方を考えることができるよう、発達段階に応じ、小中連携を図った組織的・系統的なキャリア教育を推進する。そして、各学校が地域の文化や伝統、地域の人々や自然との触れ合い、勤労や奉仕の精神の涵養に関わる活動等の研究を進める。

特別講演
新学習指導要領に基づく特別活動のあり方と実践

文部科学省初等中等教育局教育課程課　教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部　教育課程調査官
安　部　恭　子 先生

1　はじめに

着任して早いもので５年になる。この３月にエジプトに行き、EJSイスマイリア校を視察してきた。エジプトの特活オフィサー（特別活動の中核教員や指導主事に該当）の研修では、国研で刊行した特別活動指導資料をアラビア語に訳したものを活用しているため、基本をしっかり理解できており、学級会における指導助言のタイミングも適切であった。学級会の司会や日直等、学級の中での役割に子どもたちは自信をもって取り組んでいた。集団の中で自分の役割を果たす経験が、いかに子どもたちにとって大切かということである。今回の学級会のテーマは「パーティをしよう」で、集会活動について、個人のためのパーティをするのか、母の日に向けた「ありがとう」の気持ちを示すパーティがいいのか、みんなで写真などを持ち寄るパーティがいいのかなどについて話し合う内容であった。一人一人が自分の考えを基にしながら、出し合って、比べて、まとめて、決めるといった、ステップを踏んで話し合うことができていた。

なぜ、エジプトで日本式教育として特別活動が導入されたのか。EJS以外の一般校でもミニ特活という形で学級会が教育課程に入っている。それは、子どもたち自身が違いを乗り越えて、お互いを大切にしながら交流するとか、協働的に学ぶとか、そのようなことを大事にしているからである。エジプト以外でもヨルダンでNPO法人が特別活動の導入を図っている。ヨルダンにはシリア難民の子どもがたくさんおり、人権的な配慮がなかなか難しく、いじめがあったり、差別があったりする。これからの世の中、様々な人、多様な人と生きていかなければならない。そこで、子どもの道徳的・社会的な発達を促すための教育プログラムとして、特別活動を導入している。お互いを尊重し合う、相手の意見にしっかり耳を傾けてよりよい方法を決めて、協働して実践できる子どもたちを育みたいからである。

日本式教育として世界に発信されている特別活動。だからこそ、日本での確かな実践が求められる。

2　特別活動において育成を目指す資質・能力

これからの時代を生きていく上で求められる非認知能力と特別活動

OECDの学力調査で、協力して問題解決する能力はシンガポールに次いで日本は２位であった。これは、学校での取組が功を奏していると言える。日本教育新聞などは、協調性や意見調整の力などを特別活動が育んでいると論評している。数値で測れる力だけが学力ではないということが、今大事にされてきている。それはよく非認知の力と言われている。例えば、目標に向かって「粘り強く取り組む」や「情熱をもって取り組む」、他者と協力するための「社会性」や「思いやり」、情動を抑制するための「自尊心」や「楽観性」など、いろいろある。アンジェラ・ダックワースは、「これからの人生、社会における成功のためには、自己をコントロールする力や目標に向かってやり抜く力が重要」としている。マクアーサー・フェローは、「やり抜く力とは、長期的な目標に対する粘り強さと情熱」と言っている。キャロル・ドゥエックは、「目標は２種類ある」としている。「フランス語の授業でＡをとる」に対して、「フランス語を話せるようになる」は、「学習目標」と「達成目標」の違いがある。「学習目標」は「達成度に関係なく、生徒が学べるための目標である」としている。面白い調査があり、達成目標を目標として頑張ってきたお子さんと、学習目標を立てて粘り強く取り組んできたお子さんに、今まで習っていない新しい問題をテストに出したそうである。それに対しての取り組み方に大きく差が出た。達成目標で頑張ってきた子は、習ってきたことを繰り返し練習し身に付けようとしてきた。習ったことのない分からない未知の問題が

出てきた時に、取り組めない、低い点数だったそうだ。それに対して、学習目標を立てて取り組んできた子どもは、今まで習ってきたことで何とかできないかとか、何とか新しい解法はないかという風に、粘り強く取り組めていた。そのさらに後に、もう一度、今まで習った問題を出したのに、達成目標を目標としていた子どもは数値が下がったという結果が出ているそうだ。大事なのは、目標と目的を間違えないようにしなければならないということである。

学校生活において「よりよい人間関係をつくる」、「多様な他者の意見を尊重する」、「みんなのために進んで働く」、「自己の役割や責任を果たす」、「自分のよさや可能性を大切にして集団活動を行う」、「自分たちできまりや約束をつくって守る」などのことも全て非認知の力であると考えられる。特別活動の場合は非認知の力だけではなく、子どもたちの人間形成の力、将来に向けてよりよく生きていけるように、自分の夢や可能性が発揮できるように、もっと大きな人間形成の力を育んでいる。そういった点で、これからの時代、予測ができない時代だからこそ、自らよりよく生きていける力を育成することが求められる。

新学習指導要領の趣旨の実現に向けた特別活動の実践

今後日本はますます少子高齢化が進み、生産年齢人口は50年後には今の半分になると予想されており、求められる人材も変化する。2007年度に日本で生まれた子どもの半分は、107歳以上生きると予測されている。日常的に情報化や技術革新が進み、未来は予測できない。子どもたちは与えられた問いと答えではなく、自らが自分たちの生活をよりよく改善したり、何かあった時に今まで学んだことを活用しながら解決していったり、よりよく生きたりする力が必要となってくる。だからこそ、資質・能力に視点を当てて今回の学習指導要領が改訂されている。全ての教科等の目標に「見方・考え方」という文言が入った。特別活動は、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせて、資質・能力を育む。各教科等で身に付けた「見方・考え方」を総合的に活用して、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、資質・能力を育む。したがって、ただ単に実践して、「楽しかった」、「上手くいった」、「面白かった」ではいけないということである。集団や自己の生活上の課題が解決され、改善していかなければならない。知識・技能についても、例えば集団活動の意義を子どもたちもしっかりと理解したうえで目標を立てて実践する。特別活動で育成を目指す資質・能力のうち、一番大切なのは、学びに向かう力、人間性等である。「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の資質・能力の三つの視点の言葉が全て入っているからである。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

今回の学習指導要領は、全ての教科等が「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」について示している。特別活動は、各教科等と往還の関係にあることを踏まえて、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成するものである。各教科等におけるグループ学習などの協働的な学びの基盤となるのは、特別活動によって築かれたよりよい人間関係等である。そして特別活動は各教科等で身に付けた資質・能力を総合的、実践的に活用するものである。「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせるということは、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」という三つの視点を大事にしながら、集団や社会における問題を捉えて、よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や、社会への参画及び自己の実現に結びつけていくということである。

考えを深めるためには、「話す」を「話し合う」にしなければならない。「話し合う」にするということは、自分の考えとの違いを考えながら聞き、友達の発言につなげたり、相手の思いを尊重して受け止め、新たな発想に生かしたりすることが必要である。学級会においては、自分の考えを主張するだけではなく、「学級のみんなにとってよりよいものはどれか」を考えたり、友達の考えを聞いて「そういうのもいいな」「こうしたらどうだろう」というように、思考を広げたり深めたりすることができるようにする。それが各教科等においても、みんなで考えて多様な意見を出したり、互いの考えのよさを生かしてよりよく考えたりすることに生きるのである。

3　学級経営の充実

学級活動における自発的、自治的な活動を中心として

学級経営は学校経営の基本方針を基に、学級を単位として行われる様々な教育活動の成果が上がるように諸条件を整備し運営していくことである。学級経営の内容は、事務経営、授業経営、集団経営、環境経営など多岐にわたる。学習指導要領第１章総則に、「学習や生活の基盤として、教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図る」と示されているように、学級経営の一番の基盤となるのは先生と子どもの信頼関係や、子ども同士のよりよい人間関係である。では、そうした信頼関係や人間関係をどう育てるのか。学習指導要領第６章特別活動第３の１(1)において、「学級活動における児童の自発的、自治的な活動を中心として、学級経営の充実を図る」ことを示している。学級活動には(1)、(2)、(3)があるが、自発的、自治的な活動は学級活動(1)である。また、「特に、いじめの未然防止等を含めた生徒指導との関連を図るようにすること」も示されている。これは、特別活動の実践により、何かあった時に自分たちで解決するとか、多少のことには折れずにくじけないで前向きに頑張るなどの力をつけることができるからである。

これまでも小学校の総則と特別活動には「学級経営の充実」が入っていたが、今回の改訂で、教科担任制である中学校の総則と特別活動にも「学級経営の充実」が入った。日本の学校は、子どもたちの生活を丸ごと教育の場としており、掃除や給食の時間、休み時間も指導の場であり、学びの場である。子どもたちにとって、学校は一番身近な社会であり、未来に向けた準備段階としての場である。現実の社会との関わりの中で毎日の生活を築き上げていくのが学校であり、日々の生活を共にする基礎的な集団である「学級」を豊かなものにすることが大事なのである。OECDによるPISA2003の調査で、数学的リテラシー得点と学校質問紙・生徒質問紙とのクロス集計をとったところ、「学級の雰囲気が良好であるほど得点が高く、生徒のモラールが高いほど得点が高い。」ことが明らかになった。雰囲気は目には見えず、数値に表せないけれど確かにあるものである。お互いを大切にしているような温かい雰囲気の学級では、相手の思いを受け止めたり、自分の思いをしっかりと伝えたりすることができ、学びに向かう学習集団がつくられる。支持的風土という言葉がある。「互いが支え合い、認め合い、個が生かされる」、そういった「受容的な雰囲気」や「共感的な土壌」を、特別活動は子どもと先生が共につくっていく。だからこそ価値がある。支持的風土をつくるためには、相手に対する思いやりであったり、相手の多様性を認めたり、自分自身を振り返って自分はどうだったか内省したりすることによって、信頼関係を育んで人間関係を深めていくことが大切である。子どもたち自身がよりよい学級生活を友達と協力してつくろうとする、そうした自発的、自治的な活動によって、より学級経営が充実していく。

学習指導要領実施状況調査における分析結果のまとめより（H24小学校、H25中学校実施）

特別活動は質問紙による調査を行ったが、「みんなで話し合って、なかよく楽しい学級をつくっていますか」、「児童は、協力してよりよい学級生活や人間関係を築いていますか」といったよりよい人間関係の形成に関わる問いでは、日本全国の90％以上が肯定的な回答であった。子どもも先生も、よりよい人間関係をつくろう、よりよい生活をつくろうと頑張っている。そして肯定的な回答をしている子どもほど平均正答率が高く、学級単位でも同様であった。一方で、課題は何か。「児童は、指示待ちではなく、自分たちでよりよい学級生活を築いていますか」では、肯定的な回答が５割から６割となってしまい、自治的能力の育成が必要であるということが明らかになった。適切に子どもたちが力を発揮できるような場や機会の設定、すなわち先生の指導のあり方が課題となっている。「肯定的な回答をしている児童が多い学級ほど、ペーパーテストで平均正答率が高い」だけではなく、「肯定的な回答をしている教師の指導を受けている学級」ほど同様の結果であった。特別活動においてよりよい生活や人間関係をつくることによって、お互いを大事にする温かい学級の雰囲気がつくられ、互いの意見を尊重して学びを深めていこういう意識が高まり、話合いによって子どもたちが思考を広げたり深めたりすることができている。だからこそ、学力との相関がみられるのである。学校生活への目標を達成しようとする意欲を子どもたちが考えているから、学級生活がよりよくなり、それが学びに向かう力を高めている。

互いを尊重する学びの基盤となるものは「温かい人間関係」、「共感的な学級の雰囲気」、「支持的風土」などである。そのためには学級経営の充実が欠かせない。学級経営は「児童生徒による自発的、自治的な活動の充実」、「多様な集団活動を通して、互いに支え合い、認め合う集団をつくること」が大切であり、それにより「安心して発言できる学級」、「見通しをもって活動を進めていくことができる学級」、「他者の失敗にも寛容な温かい学級」がつくられる。学級活動における自発的・自治的な活動である学級活動(1)の充実を図り、互いを尊重して、みんなでよりよくなっていこうとする思いを高めることが大事なのである。

4　特別活動を「要」としたキャリア教育の充実

キャリア教育、キャリア形成

今回の改訂で、小学校、中学校ともに学級活動の内容が「(1)学級や学校における生活づくりへの参画」、「(2)日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」、「(3)一人一人のキャリア形成と自己実現」の三つに整理された。これまでもキャリア教育の内容が含まれていたが、なぜ新たに小学校においても学級活動(3)を設けたかというと、キャリア教育の視点による小中高の系統性を明確にするためである。「キャリア形成」とは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくための働きかけ、その連なりや積み重ねである。これからの学びや生き方を見通し、これまでの活動を振り返るなどして自分のキャリア形成を図ることが、これからの社会を生き抜いていく上で重要な課題である。キャリア形成につながる、「生きること」、「学ぶこと」、「働くこと」の三つを扱うのが(3)の内容である。

キャリア教育は学校の教育活動の全体を通して行うものであるが、小・中学校の総則で、特別活動が「キャリア教育の要」としての役割を果たすことが明記された。なぜ、特別活動が要かというと、各教科等の学びだけでなく、学校生活や家庭生活の学びを総合的に活用するものであり、今と将来、学校と社会をつなぐものであるからである。多様な集団活動の経験の中で、集団活動の運営や役割を果たす活動を通して、自分なりの考え方を深め、集団の一員として役割貢献、リーダーシップの発揮などのあり方やめあてをもって取り組むことができるようにすることが求められる。そのためには場や機会の充実が大切であり、小学校では場面リーダー制などにより、いろいろな子どもにリーダー経験をさせることが大切である。中学校や高等学校では、小学校の経験を生かして、よりリーダーシップを発揮できる子どもを育てていく。

「キャリアパスポート」～学習や生活の見通しを立て、振り返る教材等の活用～

小学校にも中学校にも総則において、「児童（生徒）が学習の見通しを立てて学習したことを振り返る活動を、計画的に取り入れる」ことが示され、また、特別活動においては、「学級活動(3)の指導に当たっては、学校や家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、児童（生徒）が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」が示された。「キャリア・パスポート」は、いわゆるポートフォリオ的な教材を活用するものである。

教材を活用した活動を行う意義には三つある。一つ目は、小・中学校の教育活動全体で行うキャリア教育の要としての特別活動の意義が明確になることである。特別活動は各教科等の学びを総合的に活用することから「横をつなぐ」ことになる。二つ目は、小中高へと系統的なキャリア教育を進めることに資するもので、小中高の「縦をつなぐ」ことになる。三つ目は、児童生徒にとっては自己理解を深めるためのものとなり、教師にとっては児童生徒理解を深めるためのものとなることから、「児童生徒と教師をつなぐ」ことになる。「キャリア・パスポート」の各シートはＡ４判（両面使用可）に統一し、各学年での蓄積は数ページ（５枚以内）としている。学級活動・ホームルーム活動で「キャリア・パスポート」を取り扱う場合には、学級活動・ホームルーム活動の目標や内容に即したものになるようにすることや記録の活動のみに留まることなく、記録を用いて話し合い、意思決定を行うなどの学習過程を重視することに留意する。

5　学級活動の指導の充実

各活動の特質を踏まえた確かな指導

特別活動の基盤は学級活動である。学級活動(1)の話合い活動で大切なのは、提案理由である。話合いのめあてを立てるなら、技能面だけでなく、よりよい合意形成の根拠になるように内容面も考えるとよい。そして、振り返りを次の課題解決に生かしていく。また、指導資料では、として「出し合う」「くらべ合う」「まとめる（決める）」という三つの段階を踏まえた展開例を示しているが、大切なのは、子どもが見通しをもてるようにすることである。また、低学年では、マニュアルに沿って話し合うことが多いと思われるが、板書における分類・整理やよりよい合意形成の仕方など、先生が手本を示すことが大切である。

「話し合うこと」は、基本的に「何をするか」、「どのようにするか」、「係分担はどうするか」が三つの大きな課題であるが、発達の段階を踏まえて、「どのようにするか」に重点を置くようにする。

板書は、思考を可視化・操作化・構造化することにより、子どもたちの思考を整理し決めやすくするものである。短冊を活用して意見を分類・整理し、比べやすくしたり、賛成・反対マークを貼り、話合いの過程や状況が分かるようにするなど、思考ツールを適切に用いるようにする。

よりよい合意形成のためには安易な多数決で結論を出さず、様々な意見のよさを生かして、みんなが納得できるようにする。そのためには「相手の立場に立って共感的に理解する」、「何が違うのかを明確にする」、「見方を変える」ということが大切である。また、合意形成のプロセスの例には「新しい考えをつくる」、「意見を合わせる」、「条件を付ける」、「優先順位を決める」などがあり、みんなが納得して、合意形成していくプロセスを大事にする。終末の「教師の話」のポイントとしては、話合い活動に対する指導と評価を行うことである。前回と比べてよかったこと、次回に向けての課題、司会グループへのねぎらい、実践への意欲付けなどを行う。また、事後の活動においては、実践でも提案理由に立ち返り、めあてをもって活動できるようにすることが大切である。

資質・能力の向上につながる学習過程の明確化

特別活動では、事前から事後までが実践であると捉える。そして各学習過程で育成を目指す資質・能力を意識して指導し、振り返りを次の課題解決につなげるようにする。振り返るためには、目標をしっかりもつことが必要である。そしてただ、振り返るだけではなく、頑張ったことやもっとよくするために頑張りたいことなど、振り返りの視点を明確にすることも大切である。

中学校の学習指導要領には「集団としての意見をまとめる話合い活動など小学校からの積み重ねや経験を生かし、それらを発展させることができるように工夫すること」と明記された。したがって小学校で着実にと子どもたちの資質・能力を育てるとともに、中学校校区の小学校の足並みをそろえる必要がある。なお、高等学校の学習指導要領にも「集団としての意見をまとめる話合い活動など、中学校の積み重ねや経験を生かし、それらを発展させることができるように工夫すること」と示されていることにも留意したい。

6　終わりに

特別活動のさらなる充実のために、「全体計画・年間指導計画の見直し」「参画意識を高め、自治的能力を育む」「自己有用感、自己効力感を高める」など、自発的・自治的な活動の中心となる学級活動(1)の充実を図ることが求められる。また、「見通しと振り返りを大切にした学習過程の明確化」「将来に向け、自分らしい生き方の実現」「異年齢集団活動の充実」「学校行事の充実」などにも取り組むことが大切である。

特別活動は、まさしく主体的、協働的で深い学びである。特別活動の豊かな実践を積み重ね、各教科等の協働的な学びの基盤を形成するとともに、各教科等で身に付けた資質・能力を総合的、実践的に活用し、汎用的な能力として人間関係形成や社会参画、自己実現の力を育んでいってほしい。

第一分科会「とっかつはじめのいっぽ」

模擬学級会

～２学期からの話合い活動を充実させよう～

＜アドバイザー＞
愛媛大学教育学部　　准教授　藤原一弘先生
松山市立味酒小学校　教頭　小笠原陽二先生

第一分科会では、参加者が児童役となり、模擬学級会を開きました。特別活動委員会の先生の実践を基に、議題の集め方やその例、話合いの進め方などについてアドバイスをいただきながら、理解を深めました。その後、小グループに分かれ、学級活動を行う上での困り感を出し合い、全体で共有しました。

１　模擬授業の前に

○　アイスブレイク

「拍手で心を一つに」と「おにぎり・やきそばゲーム」を通して、参加者同士の心をほぐした。学級開きにも使えるアイデアだった。

○　これまでの話合い活動を振り返って

以前行った話合い活動では、１つの議題に対して３時間費やしたこともあり、失敗をしてもそれを次の活動につなげることで教師も子どもも成長することができた。

○　議題の集め方・背面掲示について

議題を集める際に、最初は議題箱を設置していたが、それをホワイトボードに変更し、児童に書き込ませるようにした。最初は議題としてはどうかと思うものもあったが、回数を重ねる内に自然と議題の質も向上した。また、あえて教師もボードに記入することで、児童に話し合ってほしいこと（学級の課題など）を知らせることもできた。

教室背面には、Ｂ４用紙の上下に、計画委員会のメンバーや議題を見付けるためのポイント、前回の話合いで決まったことを掲示した。上記のボードとも併せることで、活動の可視化がされ、児童の話合い活動への動機付けにつながった。

２　模擬授業

今回の模擬授業の議題は「１組みんなで楽しむことができるお楽しみ会を開こう」で、提案理由は「１組みんなで楽しむことができるお楽しみ会をすれば、みんなの仲がもっと深まると思ったから」であった。今回は出し合う段階は既に済ませ、比べ合う段階から話合いを始めた。

○　比べ合う際のポイント

黒板の構造化

短冊や話合いの流れを提示することで、活動が可視化され、話合いが活性化する。また、これを続けることにより、児童が自分たちでも事前準備を行うようになり、計画委員会段階で分類も可能となる。重点的に話し合いたい内容に、より時間を割けるようになる。

意見が様々に出た際の教師のアドバイス

先に話合いに掛ける時間を決めておくと、児童もそれを意識して内容に軽重を付けることができる。

提案理由の扱い

提案理由は様々出た意見の中からどれがより良いのかを判断するための拠り所となるものである。そのため、視点（判断基準）のはっきりした理由を事前に考えさせておくことが大切となる。場合によっては、話合いの中で少し肉付けすることも可能であるし、話合いが本筋から離れそうな場合は、教師が児童にその場で問い掛けて共通理解を図ることが大切である。

話合い中の教師の関わり方

何を話し合っているのか、何をしてよいのか分かっていない児童への声掛けは大切であるが、話合い活動に慣れてきた頃合いからはできるだけ入らないようにするとよい。また、今話し合っている議題は、その１時間で終わらせることを教師も児童も念頭に置いて活動することで、話し合う内容や出される意見が精査されていくだろう。

３　学級活動での悩み

○　行事ごとの決め事が主になり生徒の意見を反映した話合い活動になりづらい。
→全校学活などで機会の均一化を図ることもできる。

○　計画委員会をいつもつか。
→ランチタイムミーティングという取組を行っている例がある。

○　下学年への指導について。
→上学年が司会をし、下学年がフロアになる方法がある。
（中学生が司会→小学生がフロア・高学年が司会→低学年がフロア）

第二分科会　小学校学級活動(1)

豊かな学校生活を創り出す主体的・協働的な話合い

～入門期における話合い活動の指導を通して～

松山市立窪田小学校
教諭　玉井　涼子

提案要旨

1　はじめに

本校は、学級数15、全校児童376名の中規模校である。

第1学年（男子16名、女子12名、計28名）は、話合い活動についてほとんど経験がなく、5月の始めに教師の進行のもと、簡単な話合いを行った程度であった。そこで、話合い活動の入門期である1年生1回目の学級会においては、児童が期待感をもち、実践を具体的にイメージできる議題を設定して話合いを行おうと考えた。また、計画委員には、教師がモデルを示し指導することで、本主題につながる話合いの基礎になると考えた。

2　実践事例

(1)　学級活動(1)の学習過程の研究

ア　発達段階に応じた議題や提案理由

各学級に議題ＢＯＸを設置した。書かれた内容を、①みんなでやりたいな、②こうするとクラスがよくなるよ、③困っています、④先生へのお願い、の4つの視点で分類し、ボードに貼り出すことで、問題の可視化を図り、一人の思いを学級全体で共有することができた。

イ　計画委員会への指導

月曜日の8時5分から10分間を「風プラン」とし、計画委員会や係活動の話合いの時間としている。計画委員会で決まったことを学級活動コーナーで紹介し、次の学級会への見通しをもたせている。

ウ　実践・振り返りの在り方

休み時間を使って、お楽しみ会の準備を行った。実施後、「ふりかえりカード」を使って、めあての振り返りをさせた。達成感や充実感をもった児童が多く、次の学級会への意欲につなげることができた。

エ　教室環境作り

各学級の学級活動コーナーで、係活動への要望やその返事等を掲示し、更なる活性化を図っている。

(2)　学級会の研究

ア　話合い活動入門期における教師の指導

1年生の1回目の学級会では、教師が、「お楽しみ会ですることを決めよう」という議題や提案理由を出し、司会を務めることで、子どもたちにモデルを示した。黒板書記は、意欲のある児童に任せた。磁石を貼る簡単な仕事ではあったが、スムーズな運営ができるよう、事前に練習をさせたり、場面を捉えて声掛けをしたりした。基本的な話合いの約束については指導した上で、安心して発言できる雰囲気づくりに努めた。

イ　合意形成の在り方

短冊を活用したり、賛成・反対のマークを貼ったりすることで、意見の分類、整理をしやすくした。教師が、提案理由を意識させる声掛けをしたり、子ども役になって話合いの軌道修正を行ったりすることで、提案理由に沿った合意形成を目指した。

3　成果と課題

○　子どもがわくわくするような議題にして、温かい雰囲気づくりをすることで、子どもたちの素直な考えを引き出すことができた。

○　発達段階に応じて、簡単な役割を与えたり、教師がモデルとして手本を示したりしたことで、次時の話合い活動への見通しをもたせることができた。

○　子どもの自然なつぶやきを拾うことができるようにする。

○　教師が先入観をもたず、広く柔軟に子どもの思いを受け止め、実現につながる方法を考えることが必要である。

○　意見を集約したり、条件を明確にしたりして、情報過多にならないようにし、合意形成をシンプルにする必要がある。

研究協議

○　議題を出させるためには、教師が日常の会話や日記等で児童理解に努め、積極的に議題への方向付けをしていく必要がある。

○　学級会は、1時間で完結することはできない。朝の時間や休み時間を活用して、計画的につなげていくことが大切である。

第二分科会　中学校学級活動(1)

主体的に考えたり、表現したりする生徒を育成するための話合い活動の工夫

～教師の適切なアプローチを目指して～

八幡浜市立愛宕中学校
教諭　岩見　和明

提案要旨

1　はじめに

本校は、生徒数131名の小規模校である。「心豊かに、たくましく、明日を生きる愛中生を育てる」という学校の教育目標の実現を目指して、日々教育活動を行っている。第1学年2組（男子9名、女子13名、計22名）には、明るく素直で、何事にも誠実に取り組もうとする生徒が多い。中学校生活にも少しずつ慣れ、出身小学校が異なる生徒とも仲良く協力して活動することができている。

しかし、話合い活動では、自分の思いや考えを主体的に表現できなかったり、よりよく合意形成を図ることができなかったりする生徒がいる。また、その生徒に対する教師の関わりもまだ不十分であると感じる。そこで、学級活動の指導場面において、生徒の力を伸ばすための適切なアプローチを行うことができれば、より主体的に考えたり、表現したりする生徒を育成することができると考え、本研究主題を設定した。

2　実践事例

(1)　計画委員会へのアプローチ

ア　現状の把握

(ｱ)　学級活動「学級目標を決めよう」の実施

(ｲ)　小学校教員との連携（情報収集）

イ　計画委員会の実施

(ｱ)　中央委員会との関連

(ｲ)　計画委員会のもち方

ウ　教員によるコーチング

(ｱ)　学級活動「学級目標を達成させよう」の実施

(ｲ)　記録を活用した研究協議の実施

(2)　発表者へのアプローチ

ア　朝の会「作戦タイム」による課題の発見と議題の設定

イ　発言への意欲、発言の質を高めるための評価の工夫

(ｱ)　生徒集会との関連

(ｲ)　終末の「生徒評価」と「教師の話」

(ｳ)　ブロック研究における小学校教員との連携

3　成果と課題

○　学級活動の様々な場面において積極的にアプローチを行った。それにより、自分の思いを進んで表現しようとする生徒が増えた。

○　説得力のある発言ができなかったり、意見をうまくまとめられなかったりする姿もまだ見られる。最終的には自分達の力で話合いを進め、よりよく合意形成を図ることができる生徒を育成したい。

○　日頃から、状況に応じた適切なコーチングを心掛け、生徒の思いや力を引き出すことができるようにすることが大切である。

研究協議

○　小中の連携の大切さを感じた。

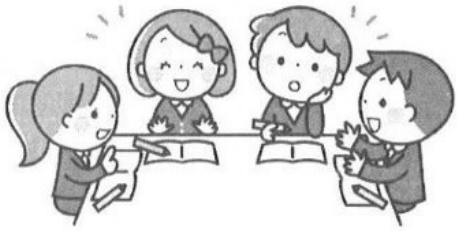
○　コーチングについて、考えを深めたい場面では、直接答えになってしまうようなアドバイスやティーチングではなく、考えるきっかけとなるようなものが望ましい。

○　発言を記録に残されているのがよいと思った。最初の時期は教師の介入も必要だと感じた。

○　主となる議題を絞ると、深く考えることができるのではないか。

○　経験を生かしていくことで、教師に頼らず司会を務められる生徒を育てることにつながる。学活の1時間で完結することは難しい。朝の会の時間を上手につなぐことを計画されている。合意形成をしていく上で、このつながる時間はとても大切になる。

○　学級活動の方向性が明確になっている。話合い活動を通して、よりよい学級づくりを目指していくことが大切である。



第三分科会　小学校学級活動(2)(3)

他者との関わりの中で自己実現を図る力の育成

～対話を大切にした学級活動の指導を通して～

伊方町立九町小学校
教諭　菊池　真由美

提案要旨

1　はじめに

本校は、全校児童53名、学級数7の小規模校である。本学級3年生7名の児童は明るく素直で、自分の思いを進んで話したり、困っている友達を進んで助けたりすることができる。しかし、友達の意見に流されてしまったり、自分で決めることに自信がもてなかったりする場面が見られる。そこで、学級活動を中心として、自分を振り返り、友達との話合いを通して自分の意思を決定し、実践する力を育てたいと考え、本主題を設定した。

2　実践事例

(1)　対話を大切にした学級活動

題材名　「係の仕事を見直そう」

ねらい　係活動を振り返って内容や方法について見直し、自分の目標をもって活動に取り組めるようにする。

ア　「つかむ・さぐる・見つける・決める」の思考過程での対話的な学び

イ　個人目標の意思決定を行うための話合い活動

(2)　問題意識を高める事前指導の工夫

ア　アンケートの活用

題材についての現状や子どもたちの思いや考えを事前に調査し、問題点に目を向けさせておく。

イ　インタビューやビデオメッセージの活用

4年生の動画により、活動の見直しについてのヒントを与える。

(3)　意欲をもたせる事後指導の工夫

ア　振り返りカードの活用

目標を常に意識したり、活動の様子や努力を確認したりする。さよならタイムで係のメンバーで話し合って一日の活動を振り返り、できたらシールを貼る。

イ　児童が互いに認め合う場の設定

さよならタイムや振り返りカードにより、認め合う。

(4)　教科等との関連

学級活動年間計画で教科等との関連を考えた。特に総合的な学習の時間や道徳科との関連を図るのが効果的であると考え、同時期に活動を計画する。

3　成果と課題

○　学級活動に対話を取り入れることで、自分の考えを確認したり、友達の意見を聞いて視点を広げたりして、しっかり考えて意思決定ができるようになった。

○　総合的な学習の時間や道徳科との関連を図ることで、対話の中に働くことの意義や意欲がプラスされたり、学級活動での実践を想起して道徳的価値の自覚ができたりした。

○　対話を通して自分の考えを広げたり、多面的に考えたりできる話合い活動にするために、補助資料を活用して様々な情報を用意したり、発達段階に応じた話合いのスキルを身に付けさせたりする必要がある。

○　児童が自分のよさや成長に気付き、さらに次の目標に向かうには、目標を短いスパンで振り返り、対話をしながら修正を加え、また実践していく、というやり方を大切にし、その記録が学年を超えて積み重ねていく方法を考えていきたい。

研究協議

○　学級活動の時間だけでなく、休み時間や雑談の中で、児童の考えや活動の様子がどんどん変化していく。

○　学級活動は、例えば係の決定については(1)だが、自分の目標設定なら(2)、自己実現なら(3)と、どこに焦点を当てるかで指導のポイントも変わってくる。

○　教師が自己実現を常に意識して実践していることが伝わった。児童にとって、人に喜ばれることが活動の原動力となっているので、人の役に立っているという視点での振り返りができるよう、カード等を工夫するとよい。

第三分科会　中学校学級活動(2)(3)

生徒同士が絆を深め、生き生きと活動する集団づくりの実践

～一人一人の振り返りを生かした学級活動の在り方～

四国中央市立川之江北中学校
教諭　二宮　裕

提案要旨

1　はじめに

本校は、生徒数400人程度の中規模校で、愛媛県の一番東に位置する中学校である。「挑戦・感動・思いやり」の校訓のもと、生徒会が中心となって委員会活動や学校行事などに取り組んでいる。

３年生の学級担任として学習指導や生徒指導、進路指導など、様々な場面で生徒と対話し、ともに活動していく中で、自分の考えを上手く表現できない生徒が多いと感じた。そこで、学級担任自身が自分のことを語る場面を設定したり、構成的グループエンカウンターなどを取り入れたりすることで、生徒同士が絆を深め、生き生きと活動できると考え、この主題を設定した。

2　実践事例

(1)「学級開きで自分を語る」

初めに、「教師の第一声」で、自己紹介をかねて、教師自身が自らの経験などについて語る。次に、「生徒の第一声」で、生徒自身が今までの生活を振り返り、感じたことなどについてワークシートに記入する。その後、その内容をもとに、教育相談を行う。

(2)「構成的グループエンカウンター」

自己理解・他者理解につながる教材を活用する。活動では、主にペアやグループで話し合い、意見を交流して、最終的に全体の場で発表を行う。

ア　「無人島からの脱出」
イ　「四面鏡」
ウ　「体育祭 HOW MUCH」

3　成果と課題

○　「学級開きで自分を語る」

- 学級担任が自らの経験について語ることで、教師と生徒との心のつながりがより深まり、生徒が自分自身について見つめ直すきっかけにすることができた。
- 学年や生徒の実態に合わせて、内容を考え、工夫していく必要がある。また、生徒に語る前に、生徒に伝えたいことを明確にし、自分の考えを整理しておかなければならないと感じた。

○　「構成的グループエンカウンター」

- 生徒同士で意見を交流することで、自分自身の考えをさらに深めることができた。初めはグループでの話合いがうまく進まなかったが、徐々に自分の意見を積極的に言うことができるようになり、挙手して発表することができる生徒も増えた。
- 活動の時間が長くなり過ぎて、活動後に自分を見つめ直す時間を十分に確保することができなかった。また、活動中に行う話合いのルールなどについても、もっと徹底しておく必要があると感じた。
- 一つ一つの活動が単発の授業になってしまい、つながりをもたせることができなかった。学校行事と関連付けて、行事への動機付けや振り返りなどに活用するなど、実施する内容やタイミングをもっと工夫する必要があると感じた。

研究協議

○　小学校から中学校へのつなぎとして、中学校での学級開きの様子を知ることができ、とても参考になった。

○　構成的グループエンカウンターを行う際には、どの活動を、どんな目的で、どのようなタイミングで行うのかということについて事前にしっかり考えておき、計画的に実施する必要がある。

○　学級活動の中で、普段から話合い活動をもっと積極的に取り入れていく必要がある。また、学級活動を通して、子どもたちの「キャリア形成」をどのように促していくのかということについても、考えていかなければならない。キャリア教育を通して、子どもたちの自己実現を目指していくことが大切である。

第四分科会　児童会・生徒会活動・クラブ活動・学校行事

自己有用感を高め、心通じ合う人間関係づくり

～異年齢集団の絆を深める活動を通して～

西条市立国安小学校
（現　砥部町立宮内小学校）
教諭　中野　吏紗

提案要旨

1　はじめに

本校は、全校児童172名の中規模校である。児童一人一人の思いや考えを生かし、主体的に活動できる取組を目指している。また、市立幼稚園が近くにあり、園児との交流を盛んに行っている。特別活動においては、異年齢集団や児童主体の集会活動を通して、学年を超えて心を通じ合うことのできる人間関係づくりを推進していきたいと考え、本主題を設定した。

2　実践事例

(1)　自己有用感を高める児童中心の集会活動

ア　にこにこ集会

本校では毎月第1水曜日の朝、運営委員会の児童が中心となって「にこにこ集会」を行った。集会実施前日に委員会活動の時間を設定し、リハーサルを行うなど準備がスムーズに行えるように工夫した。また、集会では、運営委員が月の生活目標を劇にして発表し、児童に周知した。

イ　今月のハッピーバースデー

「にこにこ集会」では、なかよし委員会が主体となり、その月の誕生日の児童を全校でお祝いした。「ハッピーバースデー」の歌を歌った後、おめでとうの掛け声に合わせて記念撮影をしている。写真は1年間掲示し、全校児童が見られるようにしている。写真を見る児童は、自分が大切にされていることを実感し、うれしそうである。

ウ　きらり発見

なかよし委員会が配布する発見カードに友達の頑張りなどを書いて紹介し合っている。「にこにこ集会」でその一部を紹介するとともに、1か月間階段に掲示している。また、各学年の学級活動や道徳科の時間にも、カードを書く時間を設定し、指導を続けた。その結果、学級の友達についての発見だけでなく、学年を超えた友達の姿を見付けられるようになった。

(2)　心通じ合う人間関係づくりを目指した異年齢集団活動

ア　なかよし班遊び

本校では、近くにある国安幼稚園の年長児と1～6年生児童で「なかよし班」を20班作り、なかよし班遊びをしている。平成30年度は年間5回行った。遊びについての話合いでは、高学年児童がリーダーシップを取って進めた。少人数のよさもあって低・中学年児童も話しやすい雰囲気がある。

イ　なかよしいも掘り

5月になかよし班ごとに畝を決めて、つるさしをし、11月にいも掘りを行った。班ごとに活動することで、高学年の児童が低学年の児童を自然とサポートする姿が見られた。

ウ　お別れ遠足

6年生ありがとう集会と同じ日にお別れ遠足を行った。道中は、異年齢の友達とペアになって話したり、助け合ったりする姿が見られた。公園では、学校ではできない遊びを考え、児童同士の絆が更に深まっていった。

3　成果と課題

○　集会活動やなかよし班活動を通して、高学年の児童がリーダーシップを取る経験を積むことができた。また、少人数での活動を通して、学年に関係なく一人一人が意見を述べやすい環境づくりができた。

○　集会活動などに下学年の児童が主体的に参加できるように、感想発表の時間を設け、発表の意欲付を高める工夫をしていきたい。

また、話合い活動の充実に向けて、なかよし班のサポートをする教員間の意識統一が必要である。更に、授業時数確保のため、行事が精選されている中、活動時間をどのように確保していくか検討していく必要がある。

研究協議

○　月目標の劇での発表や発見カードなど、児童発信の取組が素晴らしい。全校や異学年集団での活動は、高学年がリーダーシップを発揮したり、低学年がそれを見習ったりして、子どもの自主性が育つ場となっている。しかし、準備等に時間がかかることも考えられる。朝の時間や掃除の反省会、昼休みの放送などを有効に活用することで時間短縮を図りたい。

第四分科会　児童会・生徒会活動・クラブ活動・学校行事

主体的に考え、たくましく活動する生徒会の取組

～生徒の「思い」を発信源とした自治的な活動を通して～

東温市立重信中学校
教諭　安岡　義人

提案要旨

1　はじめに

本校は、松山市に隣接する東温市に位置し、四つの小学校区からなる全校生徒約600人の大規模校である。「主体的に考え、他者と協力し、たくましく行動する生徒の育成」を教育目標に、日々の教育活動に取り組んでいる。

年2回（5月と12月）開かれる生徒総会で協議する生徒からの提案には、生徒の「よりよい学校生活にしたい。」という「思い」が込められている。生徒総会で可決されたものが形になっていくのだが、その過程でたくましく成長していく生徒たちの姿を紹介したい。

2　実践事例

(1)　エントリーマッチ

生徒の思いが発信源となり、生徒会本部が企画・立案した活動である。「誰もが参加、エントリーできること」をコンセプトに、様々な活動を実施した。ただ楽しいだけの活動にならないよう、【目的】を確認するよう留意した。当日までの企画・運営等はすべて生徒会役員が行い、活動を終えると活動内容を振り返り、ＰＤＣＡサイクルの中で、活動をよりよいものへと高めていった。

(2)　「人権」を中核とした取組

例年実施していた「いじめストップ集会」を発展させた「命の集会」や、生徒総会での提案を発信源に生まれた、生徒のお悩みに生徒の声で応える、「生徒会お悩み相談室」、「The brilliant day」、さらに、ジュニア愛媛新聞でも紹介された「ほめほめ言葉シャワー」という活動を実施した。これらの活動をより自治的に、効率よく実施するため、会長等の役職とは別に、各企画に「担当」を割り当てている。

(3)　体育祭に向けての活動

体育祭では、生徒会役員は裏方に徹し、各ブロック幹部の活動を支えている。夏休みに、「リーダー研修会」を実施し、リーダー間の距離を縮めたり、リーダーとして大切なことをそれぞれが学んだりしている。夏休みが明けると、体育祭まで毎日実行委員会を開き、運営に関する悩みを共有し、どのブロックも前向きに取り組めるようにしている。

(4)　創立60周年記念行事

生徒総会で「空撮をしてはどうか」という意見が賛成多数で可決された。生徒総会で提案される意見は、「ファシリテーション」という手法を用いてまとめ、可視化し、全校生徒が考えを共有できるように工夫している。松山聖陵高校の協力を得て、重信中学校の歴史に誇りをもちながら、創立60周年の記念行事を成功させることができた。

3　成果と課題

○　これらの取組は、生徒による自治的な活動に支えられている。時には失敗も経験する。だからこそ、責任をもって活動するし、反省を生かしながら活動が進んでいく。その中で「たくましさ」が生まれ、活動を終えたときには、成就感が生まれて、自信につながる。

○　指導する側としては、どの程度生徒たちと関わり、どのような言葉を掛け、失敗したときにどのように改善に向かう助言ができるかを考えていかなければならない。全体を見るだけでなく、個々の生徒の実態によって適切な指導を行っていく必要がある。

研究協議

○　生徒が企画・立案してこれだけの活動を実施していることに驚き、とても素晴らしいと思った。自らの学校でも実践していきたいが、何もない状態から新たな企画を立ち上げ、運営していくのはとても大変だと思う。重信中学校のような状態を作り上げるにはどうすればよいのか。

○　様々な人たちの協力を得ていくこと、それが、特活の課題ともいえるのではないか。

○　過程における失敗を大事にしているのが最高だと思う。これで子どもは育つのではないか。そして「おれない心」。たくましさが素晴らしい。温かい重信中学校の気風があるからこそ、集団がよりよい方向へ進んでいるのだと学んだ。

県内各支部の研究実践紹介

南　予　生徒の自主的な活動を取り入れた生徒会活動の実践

―大洲市立大洲南中学校―

1　はじめに

本校は、前身の大洲中学校が大洲南中学校と大洲北中学校に分かれ、今年度開校60周年を迎えた。両校は、全国的にも珍しい同じ校訓、校歌を持つ兄弟姉妹校として誕生した。両校は互いに切磋琢磨し、良きライバル校として発展してきてた。その中でも、5月27日の開校記念日に両校の生徒が一堂に会し、開校記念式典を行っている。以前は、この開校記念式典後に部活動対抗試合が行われていたが、現在では、対抗試合の前に行われていたエール交換が受け継がれ、現在も行っている。

2　実践事例

○「エール交換」に向けての取組

春休みより、生徒会本部役員及び専門委員長が集まり、新年度の開校記念日に向けてエールの内容を話し合った。新学期を迎えるまでにせりふや振り付けを決定し、全校生徒に指導ができるよう動きを覚えなければならない。春休みから活動した生徒も例外なく、エールリーダーは全校生徒の公募で、オーディションにより決定することになっている。本校の伝統として、生徒数の違いを感じさせない大きな声を出すために、姿勢からそろえることを意識しており、エールリーダーたちは団長を中心にグループを作り、自分たちの目指す「エール」を作り上げていく。今年度も、生徒の手で作り上げたエールを堂々と披露することができた。

3　成果と課題

開校記念式典は、生徒たちにとって全校で活動する大きな行事であり、伝統あるものとしての意識が根付いている。リーダーとなりせりふや振りを行うことは自信にもつながり、その後の行事などに積極的に取り組む姿勢が見られるようになった。また、体育大会の応援合戦でも経験を生かした工夫が見られた。年度をまたいでの取組になるので、担当教員の引継ぎが大切になる。

中　予　自治的・自発的で主体的な活動を通して、互いを認め合う集団づくりの実践事例

—愛媛大学教育学部附属小学校—

1　はじめに

本校は、松山城の東部に位置する学校である。明治16年に愛媛師範学校附属小学校として二番町に開校以来、移転を繰り返しながら現在地に移り、今年で創立136年目を迎える。子どもたちは、「なかよく　すすんで　やりぬく」を校訓に、友達と関わりながら積極的に様々な活動に取り組み、達成感を味わっている。

2　実践事例

(1)　大運動会

本校では、毎年5月下旬に大運動会を行っている。学級文化形成の上で、学校行事はとても大きな役割を担っている。そこで、子どもたちにとって自治的・自発的な活動になるように、プロジェクトを立ち上げ、それぞれのプロジェクトのメンバーが中心となって計画・運営を行った。「リレープロジェクト」はリレーの順番を決めたり、作戦を考えたり、練習を呼び掛けたりした。「応援プロジェクト」は、応援のせりふを考えたり、ポンポンやメガフォンなどの応援グッズを作ったりした。その他「学級旗プロジェクト」、「表現プロジェクト」など、運動会成功に向けて必要なプロジェクトを子どもたちが自主的に考えながら活動を進めた。子どもたちは限られた時間を有効に活用し、自分がやるべきことに全力で取り組んだ。心を一つにして取り組むことの楽しさ、心地よさをこれらの活動で感じることができ、達成感でいっぱいの様子がうかがえた。

(2)　附属祭

附属祭とは、附属校園マイスター倶楽部（おやじの会のようなもの）で行われる学校祭のような行事である。学級として参加し、催し物をしたりステージで歌などを披露したりすることができる。まず始めに、学級として参加するか、参加するのであれば何を行いたいかを決める。そして、参加することへの目標を決めたり、役割分担をしたりして準備に取り組む。子どもたちは準備をする際、これまで身に付けてきた力を生かし、発揮しながら催し物等に取り組むことができた。附属祭を終えた後、学級として成長したこと、改善し次に生かしたいことなどの振り返りを行った。この活動を通して、子どもたちは自分の成長と仲間の成長をリンクさせ「学級の成長」として認識することができた。

3　成果と課題

学級としての形だけを目指すのではなく、学級のことを考え、自分の思いと他者の思いをリンクさせつつ、よりよいものを目指すことができる環境づくりが必要であると考える。自分も学級の役に立てるかもしれない、できるかもしれないという欲求が高まってくるような活動を工夫することで、自己肯定感や所属意識の高まりにつなげることができた。

東　予　地域とのつながりや一人一人の自主性を大切にした生徒会活動の実践事例

—新居浜市立大生院中学校—

1　はじめに

本校は、新居浜市の西部に位置し、全校生徒116名の小規模校で、小学校と中学校が隣接しているため、小中連携の特色ある活動が多い。また、地域とのつながりも大切にしており、生徒会執行部を中心として、「信頼関係で結ばれた、明るく活気のある学校」を目指し、様々な活動を行っている。

2　実践事例

(1)　挨拶運動・笑顔Dayの実施

学級や委員会等でも工夫して挨拶運動を行っている。

ア　生徒会役員による毎朝の挨拶運動

イ　児童会役員、生徒会役員全員による小中合同挨拶運動（月２回）

ウ　学級全員による挨拶運動（月１回）

エ　笑顔Day…有志による挨拶運動と友達のいいところ調べ（毎週水曜日）

(2)　グラスDayの実施

希望者で朝の時間にグラウンドの草引きを行っている。季節によっては、落ち葉を拾ったり校舎内の清掃をしたりして、校内美化に努めている。（３と９のつく日）

(3)　小中合同防災訓練

中学校独自での避難訓練だけでなく、小中合同での避難訓練を年に２回行っている。１学期の防災訓練では、校区連合自治会や消防署とも連携し、はしご車や起震車体験、初期消火訓練、救命救急講習の後、引き渡し訓練を行った。

(4)　地区別資源回収

自分が住んでいる地域を担当し、お願いやお礼状の配布時には、できるだけ直接プリントを渡すことで、地域の方々と触れ合うようにしている。また、資源回収で得た収益金の一部を、地域の保育園へ寄付する絵本代として活用している。

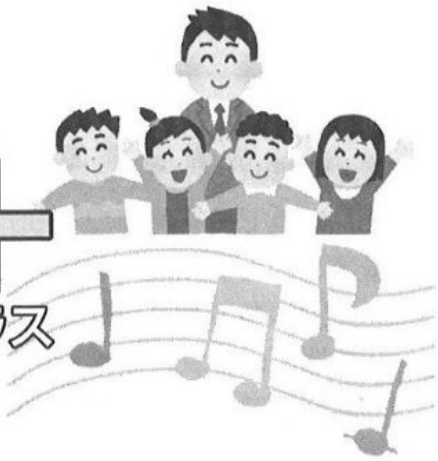
3　成果と課題

生徒たちはどの活動にも意欲的に取り組んでいる。また、生徒会役員は自分たちで新たな取組や改善すべき点などを考えて、積極的に活動を続けている。しかし、生徒数の減少に伴い、一人が担当する量が増え、その内容も多岐になってきている。そのため、今後の活動内容の精選を行う必要がある。

愛教研特別活動委員会

子どもも教師もともに楽しい学級へ

特別活動＋（プラス）



特別活動 勉強会

愛教研特別活動委員会では、毎月１回程度特別活動勉強会「特別活動＋」を開催しています。この勉強会は、特別活動や学級経営に興味のある先生方にお集まりいただき、日々の実践について困っていることや、こうしたらうまくいったということなどを小集団に分かれて語り合う場です。年齢・校務分掌に関係なくどなたでも参加できます。

様々なテーマを設定し、特別活動委員会のメンバーが提案をしたり、時には講師をお招きしたりしながら活動しており、参加された方々から好評をいただいています。開催に当たっては、事前に各校特別活動主任の先生宛てに「お知らせチラシ」を配付させていただいております。

＜主なテーマ一覧＞

- ○ 特別活動＋学級づくり
- ○ 特別活動＋学級活動(1)
- ○ 特別活動＋学級活動(2)
- ○ 特別活動＋教科
- ○ 特別活動＋係活動、委員会活動
- ○ 特別活動＋学級活動(3)　など

(例)第３回　特活勉強会

月末の金曜日に開催することが多く、松山市教育研修センターが中心となる会場です。参加者は20～30名程度です。今年度開いた勉強会の１例（第３回）をご紹介します。

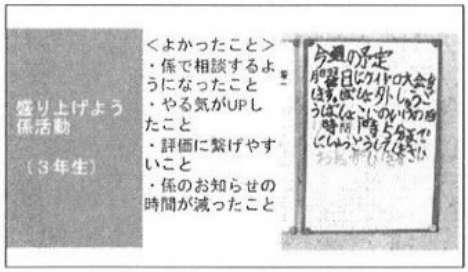
1　テーマ　特別活動＋係活動、児童会・生徒会

2　内　容

(1)　アイスブレーキングをして話し合いやすい雰囲気づくりをしました。

(2)　係活動指導で工夫してみたことや悩みなどを委員会のメンバーが発表しました。

(3)　係活動での悩みなどを語り合い、よりよい解決策をみんなで考えました。



＜「係活動の工夫」の資料＞

(4)　中学校での生徒会の指導について困っていることや工夫してみたことを委員会のメンバーが発表しました。

(5)　生徒会、児童会を運営していく上での悩みなどを語り合い、よりよい解決策をみんなで考えました。

(6)　本日の話合いをまとめ、解散となりました。

○　学校規模が違えば、ずいぶん様子も変わります。しかし、悩んでいることは同じことが多いことが分かりました。明日から実践可能なアイデアも出てきて、大変勉強になりました。

（参加者の感想）

詳しくは、愛教研Webサイトにある特別活動委員会のページをご覧ください。

http://aikyoken.just-size.net/cms/html/modules/pico30/index.php?content_id=1

第51回愛媛県特別活動夏季研究会　アンケート結果より

1　特別講演について

○　特別活動、特に学級における活動が各教科とつながり、学力の向上にも結びつくとは知らなかった。学級での「物語づくり」を大切にして、生徒の自己実現につながる一生の思い出に残る学級経営をしたい。

○　特別活動の動きが大変よく分かる講演だった。学習指導要領をより深く読み返してみようという気持ちになり、小学校の具体的な学級活動の様子もよく分かった。

○　特別活動は「学校教育目標」を基盤として行われるということで、その点で「特別活動は担任がするもの」と無意識のうちに思っていたのだと感じた。今一度本校の教育目標を確認し、一職員として何ができるかをもう一度考え、実践したい。

2　分科会について

(1)　第１分科会	○　学級活動の話合いについて、どのような視点で進め、介入していくべきかを考えることができた。また、日頃抱えていた悩みを聞いていただけたので改革を行っていきたい。 ○　子どもに話合いをさせるときは、つい助言に入ってしまうのだが、子ども同士で解決させていくということを大切にしようと思った。
(2)　第２分科会	○　学級での話合いでは、学年の発達段階に応じた担任のアプローチのタイミングや方法が大切だなと思った。経験を積ませることでよりよい話合いができるように関わっていきたい。 ○　フロアの先生方はじめ、特活への熱い思い、そして実践している姿にパワーをいただいた。子どもたちの輝く笑顔の見える発表だった。
(3)　第３分科会	○　構成的グループエンカウンターの具体例が提示されていたので２学期の体育大会後に実施したい。具体案を多く取り入れられていたので、イメージしやすかった。 ○　中学３年生を担任しており、自分を振り返る活動を取り入れて、自分を見つめる機会をつくり次のステージに向かってもらえればと思った。
(4)　第４分科会	○　私も単級の学校にいたことがあり、人間関係の固定化が課題であったが、異年齢集団の活動が効果的と分かった。また、生徒会活動の活発な取組を聞き、自分自身が子どもといっしょに楽しみながら活動をしていきたいと思った。 ○　学校規模に合った場の設定がなされ、掃除をカットして、計画に当てており無理がない。チームで協力しあう中で自己有用感が生まれるのだと思う。

編集後記

新しい元号が「令和」に決まり、新しい時代が幕を開けました。指導要領の本格実施も迎え、教育界の中も新しい時代を迎えているのではないかと思います。しかし、私たちの使命は変わりません。笑顔輝く子どもたちのため、熱意をもって頑張りたいと改めて感じた１年でした。学級経営の中心になる特別活動を、みなさんのアイデアと実践で盛り上げていきましょう。

愛教研 Web ページに特活動委員会の取組を掲載しています。ぜひ、ご覧ください。

http://aikyoken.just-size.net/cms/html/modules/pico30/index.php?content_id=1

※　令和２年度の夏季研究会は、７月31日(金)に中予地区（愛媛大学）で開催予定です。多数のご参加をお待ちしています。